

特定保健指導受診への行動意図に関連する要因の検討

○山本久美子^{*1}, 赤松利恵^{*1}, 溝下万里恵^{*1}, 武見ゆかり^{*2}

021

^{*1}お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ^{*2}女子栄養大学

【背景・目的】

成人における特定保健指導受診への行動意図に関連する要因を調べることを目的とした。

【方法】

2010年8～9月に、A社の健康保険組合員4,861名を対象に、自己記入式質問紙調査を行った。調査項目は、ヘルスビリーフモデル(HBM)にもとづき作成した、特定保健指導受診への行動意図(「もし、あなたが健診結果から特定保健指導の対象者となった場合、特定保健指導を受けますか」という質問で、「絶対受けない(1点)」～「絶対受ける(5点)」の5段階評価)、生活習慣病の重大性、罹患性、保健指導の有益性、障害と、周りの人からの声かけ、主観的健康感(各5段階評価)、家族歴、生活習慣病の認識(複数回答可)であった。全ての項目を分布によって2群に分け、行動意図とその他の因子との関連を χ^2 検定により検討した。その後、行動意図(低群(0)、高群(1))を従属変数、HBM因子、その他の因子(周りの人からの声かけ、主観的健康感、家族歴、生活習慣病の認識)を独立変数、年齢、性別を調整変数とした多変量ロジスティック回帰分析(尤度比による変数増加法)を行った。

【結果】

回答者3,645名(回答率75.0%)のうち、行動意図の項目の回答があった人は3,555名(男性42.8%,女性57.2%)(有効回答率73.1%)であった。対象者の年齢の中央値(25%-75%タイル値)は、39.0(31.0-47.0)歳(男性42.0(34.0-51.0)歳,女性37.0(29.0-44.0)歳)であった。行動意図は、

低群(1-3と回答した人)1,953名(54.9%)、高群(4,5と回答した人)1,602名(45.1%)であった。

行動意図と性別、年齢とのクロス集計を行った結果、どちらも有意な関連はみられなかったが、HBM因子と検討した結果、行動意図高群は、保健指導の有益性が高い(69.4%)、障害が少ない(82.8%)、生活習慣病の重大性が高い(64.9%)人の割合が高かった(各 $P<0.001$)。その他の因子では、周りの人からの声かけが少ない(47.0%)、主観的健康感が良好である(50.0%)、家族歴がある(44.0%)、生活習慣病と認識している病気の数が多い(37.8%)人の割合が多かった(各 $P<0.01$)。

行動意図を従属変数とした多変量ロジスティック回帰分析の結果、行動意図高群のオッズ比(95%信頼区間)は、生活習慣病の重大性1.55(1.31-1.84)、保健指導の有益性4.68(3.97-5.52)、保健指導の障害0.15(0.13-0.18)であった。

【考察・結論】

特定保健指導受診への行動意図は、HBMにより説明できることが示唆された。今後は、生活習慣病の重大性、保健指導の有益性を高め、障害を少なくするための具体的方策を考える必要がある。

特定保健指導に関わっている方をはじめ、幅広い分野の方のご参加をお願いします。

(連絡先)

山本久美子 (g1040545@edu.cc.ocha.ac.jp)
お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
TEL&FAX: 03-5978-5680